

高尾森林ふれあい推進センター所長が語る

所長 久保 武典

はじめに

近年、森林環境教育への関心が寄せられていますが、子供に限らずその親の世代においても森林など自然とのふれあい方が分からないという人が多くなってきているのではないのでしょうか。今回は、イベント等への参加者に対する伝え方の技術の一つである「インタープリテーション」について紹介します。

1. 高尾森林ふれあい推進センターの概要

当センターでは、東京都八王子市高尾町に位置し、小学生などを対象とした森林教室や森林・林業に関する体験型の公募イベント、職場体験、クラフト体験等ができるほか、森林・林業に関する展示室を見学できます。

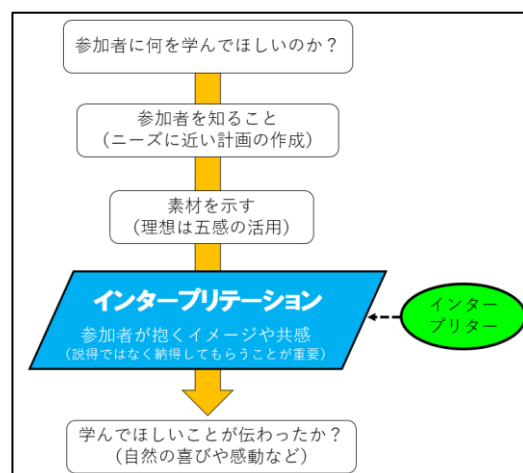
クラフト体験室では、来館者が木材や木の実などを利用して工作体験ができるようになっており、担当職員は、森林や木材利用の意義等を分かりやすく伝える役目があります。また、クラフト体験室の担当職員だけでなく、森林教室や各種イベント等を担当する職員においても、参加者へ解説するスキルが大事です。



(高尾森林ふれあい推進センターの庁舎)

2. インタープリテーション (interpretation) とは？

インタープリテーションは、参加者に対し自然・文化・歴史などを分かりやすく伝え、自然とのふれあいを通じて喜びや感動を分かち合おうとする「解説活動」のことです。自然についての知識や情報そのものを伝えるだけでなく、その背後にある意味や関係を伝える行為、あるいはその技能」といわれています。つまり、一方的に「伝える」のではなく、聞き手にきちんと「伝わる」ことを意識することが重要です。大事なことは、解説する内容が参加者の関心や興味のあることなのか、知識や経験に関連していることかどうかなど最大限に配慮することです。また、参加者の関心が持続するよう話す内容や体験を理解しやすく構成する必要があります。



(インタープリテーションのイメージ図)

す。

3. インタープリター (interpreter) とは？

インタープリテーションの役割を果たす解説者のことを「インタープリター」といいます。自然観察会などへのイベント参加者と、森林などの場所をつなぐ鎖の役目を果たす人のことをいいます。これには、自分が担当する業務はもちろんのこと、これまでの豊富な経験、知識や技能などを求められることもあります。



(森林観察でのコース説明)

4. インタープリテーションの目的とは？

森林・林業に関しては、例えば「木の伐採は悪いこと」など、実際にはその意図が正しく理解されていないことがあります。このため、インタープリテーションを通じて、こうした理解や行動に改めて焦点を当て、真の目的を理解してもらう機会とします。人々が森林環境に対する正しい知識と意義を持つようになれば、責任ある行動で森林を利用するようになります。例えば、林内での不法投棄や火の取扱いなど、理不尽



(写真などでイメージを湧かせる)

な行為や心ない秩序を乱すようなことがなくなるかもしれません。また、森林・林業に関心を持つことによって、我々の取組を応援してくれるかもしれません。

このようにインタープリテーションは、これまで経験したことのない世界に参加者を引き込み、新たな目を開かせるものです。

(ポイント)

- ▶ フィールドの提供など体験活動の場を与えること。
- ▶ 森林環境や木材利用への関心と理解を高めること。
- ▶ 刺激や啓発により生活に新しい視点を与えること。

5. インタープリテーションで森林や木の世界に引き込む！

当センターが主催するイベントへの参加者は、興味をもって自分の意志でやって来た人たちであり、楽しい経験を期待しているはずです。従って、インタープリテーションでは、イベント等を行う趣旨を説明すると同時に、参加者を森林や木の世界に引き込み、

現地での体験や知識を与えるものでなければなりません。

(ポイント)

- ▶ 参加者が新たな発見や発想をできること。
- ▶ 全体として理解しやすく、ストーリー性があること。
- ▶ 「考える」「体験ができる」などメリハリがあること。
- ▶ 情報過多にするのではなく、参加者の経験に照らしながら学べること。
- ▶ 参加者が森林環境をどのように捉えているか認識できるようにすること。
- ▶ 感性を刺激し、心に訴えるようにすること。



(大学生の体験林業での講義)

6. メッセージをどのように伝えるのか？

インタープリテーションを成功させるためにはテーマが必要です。テーマはストーリーの骨組みになります。まずは題材を選びテーマを絞ります。

(ポイント)

- ▶ この場所について大事なことを伝え、参加者の経験につながるか。
- ▶ 参加者が理解できるテーマか。
- ▶ 自分も関心のあるテーマか。



(林内での生物観察)

7. 参加者について知る

参加者は、知識や情報が満たされることをただ待っているわけではありません。あらかじめ参加者がどういう人達かを知ることにより、参加者のニーズに近い計画を準備できます。

(参加者が期待するポイント)

- ▶ 自分のいる世界を新しい見方で見るができること。
- ▶ 体験等を通じて、新たな発見や発想、リフレッシュができること。
- ▶ 参加者自らが環境（森林）をどのように見ているかを認識できること。
- ▶ 感性を刺激し、心に訴えられること。

8. 素材を利用する

テーマに関連する素材（例：樹木、加工品、用具類等の現物）の提示や利用により、抽象的な部分が参加者にイメージしやすくなります。共感が得られることが大事です。ただし、共感を得るためには、相手を「説得」するのではなく、「納得」してもらうことがポイントです。



(森林教室での丸太切り体験)

9. 導入（つかみ）

つかみには2つの目的があります。1つ目は参加者に充足感のある体験をさせること、2つ目は話すテーマを紹介することです。最初はユーモアをもって問いかけや適切な引用で構いませんが、ねらいは参加者の興味を刺激することです。最初の言葉で心をとらえることがポイントです。



(森林教室の開校式)

10. 声

インタープリターが発する声は、参加者の理解に直接影響することから、しっかりと耳に届くことが大事です。

(ポイント)

- のびのびと、率直に話しかけること。
- 友達と話す時の会話調で話すこと。
- 高い調子と低い調子を組合せてメリハリを付けること。
- 強調したい部分は意識的にゆっくり話すこと。
- 声が届き難い場合にはマイクを利用すること。



(森林観察での現地解説)

11. 言葉

イメージを効果的に伝えるためには、具体的な名詞、具体的な場所、身近な言葉を使い、不



(職場体験での現地説明)

必要な言葉や無意味な言葉は避けます。

特に、あいまいな言葉や責任回避的な表現は使わないようにします。

12. 小道具などを活用する

人は好奇心を感じたものに注目します。

小道具は好奇心を煽るような使い方^{あお}をすると、一層効果が上がるといわれます。また、普段見慣れた物でも使い方が違くと人は注目します。小道具類は日常生活と自然界との接点や類似点を引き出すことに役立ち、具体的な印象をもって体験したことを人は忘れないようです。



(火起こし体験でのデモンストレーション)

終わりに

話の組み立て方、ボディランゲージ、問いかけ、ユーモアなどのノウハウがほかにもありますが、模範となるインタープリターを参考にしつつ、自身の個性や経験を基に参加者の心をとらえる術を自分なりの方法で学んでいくことが重要です。

インタープリテーションは、19世紀末の米国の大自然を背景としたネイチャーガイドによるものから発達しました。100年余り過ぎ、主に自然体験などを通じて広がってきました。今では水族館、動物園、博物館などでもメッセージを伝える技術として活用されています。

インタープリテーションは、単なる情報の伝達ではなく、素材などを通じてその裏側にある背景などをイメージさせ、「どう感じてもらいたいのか」「どんな行動をとってもらいたいのか」を考え伝えることが大事です。インタープリテーションをさらに他のイベント等にも取り入れられるよう職員のスキルアップを図り、伝え方の質の向上を図ってまいりたいと考えています。



(「いろはの森」観察コースに咲くツリフネソウ)